

# 東 北 大 学

## I. 実 施 報 告

### (1) 実施責任者報告

東北大学教育学部附属大学教育開放センター長                      細 谷                      純

#### 1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

昭和51年度から始まった「放送による東北大学開放講座」は、東北大学の教育学部に附属する大学教育開放センターが、大学教育の社会的開放という基本的使命にもとづき、学内各部局の協力を得て、企画・実施するという形でおこなわれている。ただし、この講座の企画にあたっては、本センターの「運営委員会」（教育学部をのぞく9学部と教養部からそれぞれ代表として委員が1名ずつでるほか、本センターの専任教官、兼任教官、教育学部事務長、庶務、教務、会計掛長の教育学部スタッフで構成）でテーマ、担当講師等を慎重に審議し、全学の意向が十二分に反映されるように配慮されている。また、講座の運営、実施の主力となるのが「大学教育開放センター会議」（本センターの専任教官、兼任教官、教育学部事務長、庶務、教務、会計掛長で構成）で、講座の細目の審議、決定、そして実施にあたる。加えて、本「放送による東北大学開放講座」のために、教育学部に、以下の委員会が特別に設けられ、円滑な講座実施がはかられている。1）講座実施委員会（本センターの専任教官、兼任教官、それに講座出演全講師で構成）2）総務委員会（企画・運営・調査・広報・渉外・庶務担当）3）テキスト委員会（印刷・校正等担当）4）スクーリング委員会5）理解度調査委員会

また、番組制作にあたる放送局との関係については、講座を企画・編成するにあたって、「企画段階から制作者の参加を」という放送局スタッフの要望を十分に考慮にいれ、テーマを設定する段階から、大学と放送局とのあいだで意見を交換しあい、議論を深めながら、企画・編成をすすめた。

さらに、本開放講座を実施するにあたっては、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会から「後援」をうけ、広報活動などで便宜をはかってもらう一方、仙台市博物館の協力も受け（昭和61年度から）、館内の一劃で「再視聴センター」を開設する便宜をはかってもらっている。

加えて、県内各市町村からは、適宜、市（町村）政だより等での講座開設報知、そしてポスターの掲示等で協力をうけている。

#### 2. テーマの選定とそのねらいについて

テレビ講座「みちのくの建築～風土と景観～」

東北のさまざまな建築物に光をあて、その文化的背景をさぐるため、「みちのくの建築

～風土と景観～」をテーマとした。

人間の生活のなかから生み出された文化的所産として建築はとらえられる。本講座では、くらし、宗教、社会の変動などと密接にかかわりながら発展してきた建築の歴史、文化的空間としての建築、建築の構造などをとりあげて、東北地方の建築について考えることをねらいとした。

#### ラジオ講座「老年期」

人生80年時代といわれる現代において、老後をみのりある豊かなものにするにはどうすべきかをさぐるため「老年期」をテーマとした。

今日、本格的な高齢化社会を迎え、老年期の問題は多岐にわたって現れ始めている。本講座では、医療・体育・心理・社会福祉・教育などの面から多角的に検討し、老人自身の問題に留まらず、幅広く捉える。そして老年期が抱える問題の解決の方向を考えることをねらいとした。

### 3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

「放送による東北大学開放講座」は、放送番組（講義）と印刷教材（テキスト）とスクーリングを3本の柱として開設されている。したがって、本講座を編成するにあたっては、それぞれの講座の基本構想をしっかりと練り各講師の共通理解を深めることはいうまでもないが、それぞれの柱（放送番組と印刷教材とスクーリング）のもつ特性を十分に考慮し、そのうえにたって、講座の企画・構成がすすめられた。そのさい、とくに留意されたのは、以下の点である。

1)「講義目的の明確化」2)「講義内容の一貫性」3)「一定の教育水準」4)開放講座としての性格を強くうちだすために、テーマを設定するにあたっては、一般市民の多様な関心を配慮する。5)これまで本センターが実施してきた「放送講座」が掲げてきた主題のより一層の展開といった点も考慮する。

また、印刷教材を作成するにあたっては、以下の点をとくに考慮した。1)平明な叙述と独立した読みものとしての一貫性をもたせること。2)放送内容との相即性は必要であるが、完全な一致は求めない。3)テレビ講座の場合、放送に用いた図表等はできるだけテキストに収録する。4)ラジオ講座の場合、電波メディアにのらない図や表、絵や写真などはできるだけテキストに収録して、受講生の学習に資するように配慮する。

本講座は、放送メディアを活用した講座であるが、受講生がこのような講座で学習しようとする、どうしても講師や仲間同士のコミュニケーションの機会が乏しくならざるをえないことがある。したがって、本講座ではこのような特殊事情を考慮して、受講生の学習効果の向上に資するためにスクーリングを実施している。スクーリングは受講生の数が多いため、あらかじめ本センター宛、郵送によって質問をよせてもらい、それに対する回答を含めた講師の補足説明、さらに会場での質疑応答といった形でおこなわれ、例年、受講生から好評を博している。

### 4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

本センターは、この放送講座を開設するにあたり、受講生の講座受講によって生ずる教授・学習効果を検討するため、例年、質問紙形式の理解度調査をおこなっているが、本年度もこれを実施した。ただし、この結果については、現在、調査票回収、集計処理作業中なので、その詳細はいずれ日を改めてということにしたい。

全般的に、本年度の受講生は、きわめて熱心で、テレビ講座、ラジオ講座の各講師の先生方も異口同音にこの点を述べられていた。また、スクーリング会場で、講師の先生方の懇切丁寧な受け応えもあり、時間が不足する場面もかなりあった。

## 5. 印刷教材の作成過程について

「放送による東北大学開放講座」は単年度事業であり、この放送講座を担当する講師の先生方にとって、番組出演もさることながら、テキストの執筆、校正が時間的制約のなかで、たいへん厄介な仕事であることはいうをまたない。また、原稿割り付け、校正、装丁、印刷、製本などの全過程に関わる「テキスト委員会」の作業も骨の折れる仕事であり、本年度も夏休み返上でつづけられた。

## 6. 学習指導の実施状況について

本講座では、前述したように、受講生の学習効果の向上に資するためにスクーリングを実施しているが、その概要は以下のとおりである。

◇方法 1) 郵送による質問への回答を含めた講師の補足説明

2) 会場での質疑応答

◇日時・場所

回	月日(曜)	時 間	会 場
開講式	9月30日(土)	ラジオ・テレビ	東北大学法学部
第1回		14:00~16:00	
第2回	11月5日(日)	ラジオ10:30~12:30 テレビ13:30~15:30	東北大学教育学部 東北大学文学部
第3回	12月3日(日)	ラジオ10:30~12:30 テレビ13:30~15:30	東北大学教育学部 東北大学文学部
第4回	12月17日(日)	ラジオ10:00~12:00 テレビ10:00~12:00	東北大学教育学部 東北大学文学部
閉講式	12月17日(日)	ラジオ・テレビ 12:00~12:30	東北大学教育学部

◇出席者数

講 座	受講生総数	9月30日	11月5日	12月3日	12月17日
ラ ジ オ	169(100)	92(54.4)	45(26.6)	54(32.0)	44(26.0)
テ レ ビ	181(100)	89(49.2)	56(30.9)	52(28.7)	48(26.5)
計	350(100)	181(51.7)	101(28.9)	106(30.3)	92(26.3)

＜参考＞再視聴センター利用状況

講 座	実施回数	延べ人数	1 回平均	仙台市博物館延べ人数
ラ ジ オ	10回	7 人	0.7 人	55人
テ レ ビ	11回	3 人	0.3 人	56人

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

東北大学の教育学部に附属施設として「大学教育開放センター」が設置されたのは昭和48年のことである。大学教育の社会的開放にかんする研究と事業活動をおこなうことがその設立の趣旨であり、この種の施設が、わが国の国立大学におかれたのは、これがはじめてであった。本センターは、大学教育開放活動が大学の重要な働きの1つでなければならないという認識にたって、この面で世界の先進諸国に遅れをとっているわが国の現状を多方面から検討し、大学教育を一般社会に開放していくにあたってのさまざまな問題を、みずから開放事業を企画・実施するという実地の経験を通して研究・解明していくことを任務として発足したのである。したがってセンターの主要な活動は、研究活動と事業活動の2つに大別できるが、昭和51年度からはじまった「放送による東北大学開放講座」は、本センターの事業活動のなかに「特別事業」として明確に位置づけられ、すでに10年以上を経過して、本センターの看板事業として地域社会にすっかり定着している。本センターは、この「特別事業」のほかに、「主催事業」「共催事業」「受託事業」など数多くの大学開放講座もおこなっているが、まだまだ地域社会全体のなかで量的にみれば大海に投じられた一石にも等しいものである。そのなかで本「放送による東北大学開放講座」は、放送メディアの利用ということから、毎回放送時には数万人の視聴者を数える（視聴率調査）ということから、本センターとしては、大学教育開放の主旨をもっとも活かせる講座として大いに注目し、大いに期待し、またよりよいあり方を目ざして毎年度、さまざまな工夫をこらし、努力を重ねてきた。これまでの成果がそれであるが、大学と地域社会とを結びつけるパイプ役として、その真価が問われるのはまさにこれからであり、これまで以上に内容の充実した放送講座を企画、実施していくにはどうしたらよいか、それが本センターの課題であることはいうまでもない。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

大学教育開放センターが、これまで実施してきた放送講座のなかで、昭和52年度開設の「地域の科学」は、本学の教養部、それに在仙の私立女子短期大学の社会学の授業の一部として、昭和54年度開設の「地震災害と市民生活」は、本学の教養部の正規の授業の一環として、また同年開設の「がん制圧をめざして」と昭和56年度開設の「生命をひもとく」は、本学に併設されている医療短期大学の授業の一環として、さらに、昭和61年度開設の「人と国家と社会と～宮城経済近代化のダイナミックス～」は宮城教育大学の授業に利用されたが（いずれもテレビ講座）、本年度開設の放送講座については「大学の授業への活用」の計画はとくにない。ただし放送講座の「大学の授業への活用」は、掲げたテーマの性格

にもよろうが、その可能性は大いに検討されてしかるべきと考えている。

## 9. 実施上の問題点と今後の課題等について

平成元年度に実施した「放送による東北大学開放講座」をふりかえって、今回の講座開設にあたって、浮かびあがった問題点、特記事項のいくつかを摘記してみたい。

- 1) 本年度は、テレビ講座が、昭和62年度の「結晶：その生いたちと個性」、昭和63年度の「マテリアル・サイエンス」にひきつづき「みちのくの建築」という理科系の講座、またラジオ講座が、心理学・教育学のメインテーマ「人間の成長と発達」シリーズとして「老年期」という講座を開設した。受講生数は「みちのくの建築」が181名、「老年期」が169名と、両者ともに定員をうわまわったが、とくに例年受講生のさほど多くない理科系の講座「みちのくの建築」に応募者が多かったのが注目される。建築という比較的身近なテーマであり、歴史を中心に辿りながら、環境工学や構造の視野もとりのれたことによると考えられる。また、スクーリングにおいても実に多様な質問が出され、関心の高さが窺われた。そして坂田主任講師らの丁寧な対応もあって、受講生から好評を博した。
- 2) ラジオ講座は、医療・体育・心理・社会福祉・教育など多面的に老年期を考えるという意図から、学外も含めて総勢10名の講師によって編成された。担当講師が多い場合、内容の一貫性を保つことが難しくなるが、寺田主任講師のひとかたならぬご尽力により、一定の教育水準と講座全体のまとまりを持つことが出来た。しかし、スクーリングの際に全講師がそろふということが難しく、担当外の質問が出された場合には次のスクーリングの宿題にせざるを得なくなるほど、課題も残した。
- 3) 本センターでは、放送講座の特性を考慮してスクーリングを重視しているが、テレビ、ラジオ両講座とも時間が不足する場面が見られ、今後スクーリングの進め方を工夫する必要があると思われる。
- 4) 例年のことではあるが、出演講師の側からすれば、準備期間の短いことが問題である。担当講師は、講座全体をふまえて、数ヶ月のうちに、講義、番組の構想を練り、企画会議への出席、放送局スタッフとの打ち合わせに従事する。このような超過密スケジュールのなかで、取材活動、テキスト原稿執筆、スタジオ録音、録画をこなしていくということになるが、これは相当過重な日程であった。とりわけ、本年度ラジオ講座の場合、学外の講師らとの連絡や日程調整に時間がかかり、主任講師の負担がさらに大きくなってしまった。

## (2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) みちのくの建築—風土と景観—

主任講師：工学部教授                  坂 田                  泉

建築は、人間個人ばかりでなく地域の生活環境条件に密接に関連しているので、それが包含される地区、都市にまで及び、その地方の自然と人間の調和を図りつつ、自然を制御

して生活の容器の役割を果たし、一方でその時代の人々の持つ社会、経済、技術、更に美意識、価値観、芸術などのすべてを反映した文化的創造物として、歴史的移り変わりの中で、人間の生活環境の質を規定する。

そこでは伝統的に美的要素が強調され、芸術的側面が色濃く現れて来る。建築が、人間を含む科学と芸術の結晶と称される所似である。このような観点から先ず現在の多様化した建築の原形にさかのぼって歴史的過程を辿り、次に現代建築のかかえる複雑多岐にわたる諸問題の中で身近な問題の一端について触れることにした。

第1回は建築を取り巻く環境を自然現象と人為的な両面から述べ、建築の成立する原点を考えてみた。第2回目は最も人間生活に近い住居、そして古代人の生活を振り返って信仰に関する建築については第3回に大陸伝来の寺院、第4回に日本古来の神社の成立と変遷、第5回は現代生活と関係の深い西洋建築の伝来、第6回は近代建築思想の成立について西洋と日本との関わりを深め、第7回では振り返って有機的とも称される伝統から発生した古い町並みと現代生活について考えてみた。通常の建築史の分野では、独立して存在する単独か連続の建築や街区景観を取り上げてきたのであるが、“まつり”の如く特定の時季において活躍する異なる系統の建築もみられるので、第10回では日本劇場史を加えてみた。かくの如く目にうったえるのが建築ではあるが他面環境工学の如く感覚的な面もあるので建築の音と光に関する内容、そして地震国日本では避けて通ることのできない構造についても話していただいた。

このように建築を構成する要素は、それぞれがかなり独立していながら、相互には切り離すことの不可能な複雑な様相を呈している。

なお、スクーリングでは、用意された毎回の2時間を充分に使っての活気のある質疑応答となり、講師としても非常に手ごたえのある有意義な時間が持てた。受講者の興味は、社寺や洋風建築に重きが置かれているやに見受けられたのは、その年齢層によるのかも知れないが、美しい町並みや、また落書きなど環境の破壊に対しての危惧など、単に視覚のみならず基層面にも踏み込んだ応答となり、またこのことは音楽とホールの諸問題についてスクーリングにおける講義を持つこととなり、さらに耐震構造など身近な質問を受けることになった。何はともあれ最終回では夢の建築をとの当初のおもいとは異なり、東北地方の現在のかかえる建築諸問題のさわりを各講師が話すことにとどまってしまった。このような建築について話し合える機会を与えていただいた開放センターの諸先生や、多くの協力をいただいた方々に篤く御礼を申し上げる次第である。

(ラジオ科目) 老年期

主任講師：教育学部教授                      寺   田                      晃

現在、我が国は、これまでに経験したことのないほどの「人生80年時代」という高齢化社会を迎えるにいたっており、統計的な予想では21世紀の初頭には高齢者の比率は全人口の16%、さらに2020年には世界で高齢者が最も多いことになると見積もられている。従って我が国としては、このような情勢に備え、今後社会、経済、文化、家庭、その他さま

ざまな面で、国民生活の在りかたを極力究明し解決して、“超高齢化”にふさわしい方策を具体化していかなければならないことになる。

本講座は、老年期に関する現代諸科学の知見や研究諸成果を可及的に収集し、老年期とは具体的に人生のどのような時代なのかを解説するとともに、いかなる所に問題点があり、かつ今後どんな方策がそのために必要になるのかという、上記の国民的課題に関し、社会一般の理解を高めることを目標として計画されたものである。

一般に老年期は、身体や生理的機能の加齢変化によって機能が著しく低下し、疾病を伴いやすい時である。また、精神面でも、社会的適応や精神的健康が損なわれ、障害が多々伴いがちなものである。そのため老年期には、社会保障も十分考慮されなければならない。それ故、老年期問題は、とりわけ医学および心理学、教育学、社会学ならびに社会福祉学、などを中心にいろいろな科学分野に関係する。それだけに本講座としては、この広範にわたる各分野の内容をどの程度まで聴取者に理解してもらえかが懸念された。そこで印刷教材の執筆に当たっては、どの分野についても、最前線の科学的知見を豊富に用意することを期し、しかもそれらを簡明かつ分かり易く解説することに心がけた。また放送教材には、数回ごとに担当講師と主任講師との対談をはさみ、各分野でどんなことが主要課題になるのかを中心として、放送内容のまとめを行った。

第1回は「老年期とはどんな時代なのか」の総論である。第2回から第4回では、身体・運動的な特徴と疾病、ならびに医学的な見地からの保健について解説した。第5回から第8回は精神活動の特徴と障害・疾病、および人格・社会的な適応を内容とした。続いて第9回より第11回では、主に社会福祉上の問題を、第12回では生涯学習の意義と内容、方法などをそれぞれ取り上げた。第13回は、最終回として、今後の老年期問題の展望を医学・心理学・社会学の見地から3人の講師で論じ、全13回の内容をまとめた。

今回の「老年期」の経過は、あらまし以上の通りであるが、当該内容に老年期における生活科学（たとえば食生活や住まいの工学、芸術・美学的な側面）が乏しかったのは、構成上、唯一心残りな所である。また、各回の放送に音として高齢者の声をより多く採録し、高齢者の意見や要請、感想などを逐一参考にすれば、内容がもっと具体的になったものと反省している。しかし、スクーリングでの聴取者からの質疑により、以上のような点はかなり補完できたのではないかと考えている。スクーリングは、聴取者が主に高齢者であったためか、三回ともに和やかにして熱心で有効なゼミナールとなり、医療を始め、その他老年期として切実かつ現実的な問題が取り上げられた。

最後に当「老年期」の企画と実践を総じ、かつ「老年期」を終了して、若干とも主任講師としての私見を付記すれば、老年期問題を単に今回だけに止どまらず、これからも何らかの機会と方法とをもって取り上げ、社会一般（各界・全年齢層の人々）の理解を深める必要があるということ、さらに老年期とはあらゆる面で個人の状態が減退し弱い時期で、しかも身に多くの“つらさ”が重なりつるときであれば、これをのり切り、いわゆる“統合”の境地へ向かうには、結局、究極において単に社会や人をたよりに生きるのではなく、個人の精神的基盤として“人を恃まず”の心積もりが肝要となるのではないか.. ということを学んだことである。

本講座では、東北大学だけでなく東北福祉大学、仙台大学、さらに秋田大学と広く専門の先生に講師をお願いした。御多忙の中に印刷教材とに力を傾注して下さったこと、また多くの聴取者に御参加の栄を賜り教材を理解して熱のこもった討議と批判などを戴いたことに、心からの感謝の意を表したい。さらに企画のすべてを取り持って下さった放送局の各位、および開放センター、スクーリングでの司会者の先生方に深甚の謝辞を申し上げる次第である。



## Ⅱ. 製 作 報 告

### (1) 製作責任者報告

東北放送テレビ局次長            佐々木 三 郎

#### 1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

“大学教育をメディアを通じて一般市民に公開する”という基本姿勢がある以上、講座内容も当然のことながら相当の知的レベルが求められる。したがって、ハウツウものは避ける、教養講座の容易な制作態度を排する…。これが講座スタート以来の、大学側、局側の共通認識である。しかし一方において、年齢、職業、興味、関心の多様性など、さまざまな属性の受講生に、いかに分かり易く、かつ知的水準を保ちつつ伝達するかは、毎年試行錯誤の連続であり、制作担当者にとっては永遠の課題といっても過言ではない。

ともあれ、基本方針として

- (1) テーマの選定段階（企画）から大学教育開放センターと協議する。
- (2) 制作担当者を相当期間専任とし、講座制作のノウハウの蓄積・継承につとめる。
- (3) 大学教育開放センター、講師と局側が十分な打合せ時間を確保する。
- (4) スクーリングには関係者全員が出席し、制作上の参考とする。

このような制作方針に沿って、ラジオ、テレビのメディア特性を十分意識しつつ、番組づくりを進めた。さらに今年も、過去この講座に出演した講師や研究機関とも接触を絶やさず、次なる企画の助言や講師の推薦などにも協力をいただくなど、人脈づくりにも力を注いでいる。これは局側にとっては大きな財産となっている。

#### 2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

（ラジオ「老年期」）

「青年期」（昭54）、「少年期」（昭57）、「幼年期」（昭59）に続くシリーズ的性格をもった企画で、人生の最終段階である老年期を取り上げた。心理学的考察をタテ糸に人生80年時代といわれる高齢化社会をいかに有意義に過ごすか、身体的側面、社会参加、生涯学習、家族関係など、幅広い視野から老年期のかかえる様々な問題にアプローチした。テーマによっては、老人問題を扱った文学作品の朗読や老人の生の声を挿入し、受講生の理解を深めるよう工夫した。

（テレビ「みちのくの建築～風土と景観～」）

人間生活の文化的所産といわれる建築を、古墳時代から現代まで、暮らし、神・仏とのかわり、音と光、まつりの空間など、歴史的時代的流れ、構造的発展を中心に構成した。したがって、全体としてタイトルの“みちのくの…”を大きく踏み越えた内容となり、映像素材は、北海道から近畿地方まで取材対象が広がったほか、入手できる範囲で世界各地の映像素材を使用した。

また、素材の選定、取材には殆ど欠かさず担当講師の立ち会い・同行があり、講義内容

に沿った説得力のある絵づくりが出来たのではないと思う。

### 3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

今年度の講座視聴状況は別添の「ラジオ聴取率・テレビ視聴率」の通りである。テレビは13回平均で2.2%と、昨年と全く同じ視聴率を記録した。放送時間も例年通り土曜日午前7時台と、編成的には良い時間帯を確保することができた。また、今年度は特に一般視聴者から5名を選び、テキストを持たない視聴者が講座で何が分かったか、理解できなかった点はどこかなど、13回のシリーズを通してアンケート調査を実施した。好意的、肯定的内容が多かった反面、固有名詞、専門用語が分かりにくかった、第1回の冒頭の“受講生の皆様…”は一般視聴者を考えない挨拶だ、内容的に詰め込み過ぎではなど具体的指摘も多く、今後の制作の参考資料としたい。

一方、ラジオの聴取率は昨年と較べ若干低下したが、これは、取り上げるテーマによって生ずる関心の幅の範囲内ではないかと推測される。

いずれにしても、受講生の何十倍もの人が、視聴している現実を直視しながら、より分かり易い番組づくりに努力したい。

### 4. 実施上の問題点と今後の課題等について

毎回同じ問題提起をするのもいささか心苦しいが、著作権クリアは番組制作・放送の大きな壁となっている。具体名は差し控えるが、今年度のテレビ講座では、10万円の喜捨（某教会）、100万円の放送料（某劇団）を求められ、取材を断念するケースが相次いだ。全国放映ではない、文部省の仕事とかの言い分は通用しない。また、取材対象の広がり、外注費のアップなど、制作コストの上昇も頭の痛い問題である。制作意欲、質的低下につながらぬよう、何年に1回かは、制作費の見直しをお願いしたい。

平成2年度以降の、30分番組化に伴う制作費問題も同様である。現行の45分番組と比較して、すべてが2/3で済むなら話は別だが、取材日数、出演料を始め直接費、間接費など殆ど変わらないのが、制作現場の常識だから。

平成元年度 東北大学開放講座

ラジオ講座「老年期」

平成2.1.8

ラジオ・テレビ視聴率

テレビ講座「みちのくの建築」

調査部

I ラジオ視聴率

	個人全 体	エ リ ア 内 推 定 数	男 性 ( 12 歳 以 上 )	男 性 (歳)				女 性 (歳)				男	女	性	学 生 ・ 生 徒	有 職 者	家 庭 無 職 者	性	ド ラ イ バ ー	全 体
				12	18	25	35	45	12	18	25	35	45							
12月2日(土)	フーアーユー	18:45~19:00	0.8	24,000人	1.6	※	2.9	2.2	2.3	※	※	※	※	※	※	※	※	※	1.6	0.3
12月3日(日)	東北大学開放講座・老年期 第8回「老年期と職業」	19:00~19:30	0.3	9,000	0.5	※	2.9	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	0.5	※
		19:30~19:45	0.5	15,000	0.5	0.5	2.9	※	※	※	※	2.1	※	※	※	1.1	※	0.5	※	※
		19:45~20:00	0.8	24,000	1.1	0.5	2.9	2.2	※	※	※	2.1	※	※	※	1.1	※	1.0	0.5	0.5
12月3日(日)	ふるさと愛唱歌 東北大学開放講座・老年期 第9回「高齢者と社会保障」 ミュージック・バーソネイジ	19:50~20:00	0.5	15,000	1.1	※	※	4.3	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	1.0	0.5
		20:00~20:30	0.5	15,000	1.1	※	2.9	※	2.3	※	※	※	※	※	※	※	※	※	1.0	0.5
		20:30~20:45	0.3	9,000	0.5	※	※	※	2.3	※	※	※	※	※	※	※	※	※	0.5	0.3
		20:45~21:00	※	—	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※	※

II テレビ・世帯視聴率

	個人全 体	エ リ ア 内 推 定 数	男 性 ( 4 歳 以 上 )	男 性 (歳)				女 性 (歳)				男	女	性	学 生 ・ 生 徒	有 職 者	家 庭 無 職 者	性	ド ラ イ バ ー	全 体
				4	12	13	19	20	34	35	49	50	59							
JNNおはようニュース & スポーツ	6:30~7:00	5.2	5.8	3.6	5.1	5.1	5.3	4.1	4.4	3.3	2.8	2.5	(—)	2.7	4.2	49,560	25,960	47,200	13週平均	エリ ア内平均 視聴世帯数
東北大学開放講座・みちのくの建築	7:00~7:45	2.4	2.1	1.5	2.7	1.7	3.3	2.9	2.2	2.6	2.1	2.1	(1.9)	1.3	2.2	25,960	25,960	47,200	13週平均	エリ ア内平均 視聴世帯数
奥さま広場	7:45~8:00	4.4	5.1	2.5	7.3	3.2	1.8	4.2	4.2	3.0	4.4	4.7	(—)	3.1	4.0	47,200	47,200	47,200	13週平均	エリ ア内平均 視聴世帯数

(注) 12/22(金)は放送時間が10:00~10:45

III テレビ・個人視聴率 (10月14日)

	個人全 体	エ リ ア 内 推 定 数	男 性 ( 4 歳 以 上 )	男 性 (歳)				女 性 (歳)				男	女	性	学 生 ・ 生 徒	有 職 者	家 庭 無 職 者	性	ド ラ イ バ ー	全 体
				4	12	13	19	20	34	35	49	50	59							
JNNおはようニュース & スポーツ	3.4	125,800	2.7	2.7	6.2	4.4	4.4	4.7	2.4	4.7	2.4	4.7	2.4	4.7	2.4	4.7	2.4	4.7	2.4	4.7
東北大学開放講座・みちのくの建築	1.4	51,800	1.8	0.6	1.6	1.6	1.6	3.0	0.7	3.0	0.7	3.0	0.7	3.0	0.7	3.0	0.7	3.0	0.7	3.0
奥さま広場	2.4	88,800	1.8	1.8	2.3	3.6	3.6	5.2	3.0	5.2	3.0	5.2	3.0	5.2	3.0	5.2	3.0	5.2	3.0	5.2

注1. ラジオ聴取率1%当たりのエリ  
ア内人口は約30,000人。

注2. テレビ個人視聴率1%当たりのエリ  
ア内人口は約37,000人。  
(以上60年国調)

注3. テレビ世帯視聴率1%当たりの世帯数は  
約11,800人。  
(平成1年3月末)

注4. ラジオは12~59歳、テレビ4歳以上。

## (2) 番組制作担当者の所見

(テレビ科目) みちのくの建築—風土と景観

制作担当者：東北放送テレビ制作部次長

天 野 弘 三

いわゆる専門語について

大学講座番組の制作を担当して、毎年繰り返し思うことは、講師に大きな重圧と首枷をかけている負目である。

第一に、難解な内容でも極力平易な表現で、つまり、それ以上平易にすると視聴者が誤解する怖れすらあるようなレベルまで易しい表現を選んで講義して貰わなければならない。これは、受講生は勿論のこと、テキストを持たない一般の視聴者にも広く、気軽に見て貰いたい、そのためにも「難解」、「かたい」といったイメージを排除したいから。専門家である先生方にとって、大変な精神的苦痛をとまなう筈である。なぜから、先生方にとって日常語である専門語の使用をなかなば放棄して、専門分野を語らねばならないことになるから。

学問的、あるいは科学的ということは、いうまでもなく正確を期すということだ。その反対は「非科学的」ということであり「無知」と同義語にさえなっているのは恐ろしい。放送は、いうまでもなく極めて一方的なコミュニケーションである。そうである以上、送り手は受け手（視聴者）にできるだけ正確に内容を伝えねばならない。そのためには、曖昧なものを少しでも明確にする義務を負う。

講座番組においても、なにかを論ずる時、まず言葉の定義が必要になる。同じ言葉を送り手と受け手が別な解釈をしていては、時間の浪費にすぎず、上滑りに終わり、一知半解のままに終わってしまう。

とはいえ、専門語を逐一懇切丁寧に解説するのは、限られた放送時間内では無理な話しである。では、どうすればいいのか。「より正確に」言葉を使うことに努めてきて、そこから論理学や科学的思考を育ててきたといわれるヨーロッパ人と異なり、むしろ曖昧さを好み、その表現を形成してきた日本人の特性に負んぶするというのは如何でしょうか。

「ちょっと前」とか、「…を少々」とか「その辺のところを…」といった曖昧な表現をよく使い、表現は解釈の自由を許し、多義性そのものだが、それでいて日常生活では殆どなんの支障もきたさない融通無碍な特性に。

余談はさておき、このように講師は、言語の二律背反の中にいることになる。一方に厳密な定義に基づく専門語があり、他方には、平易で耳ざわりのいい、曖昧な表現がある。この二つの谷間で、しかも大急ぎで講義を進めなければならないから大変だ。

第二に、講義が単なるインビテーションや、解説に終わることなく、そこに何らかの新しい視点が隠されていて、他の専門家にとっても、刺激的内容が盛られていなければならない。これもまた、大変なことに違いない。

※ 今回、はじめて一般視聴者を被験者とする、番組のアンケート調査（全回）を実施しまし

た。詳細は後日ご報告します。

(ラジオ科目) 老年期

制作担当者：東北放送ラジオ局制作部

杉 崎 祥 子

世界に類をみない速度で、日本は高齢化社会を迎えた。その中で、多岐にわたって出現してきた老年期問題は、個人はもとより、社会を、家庭を、カオスの渦に巻き込んだ。このような社会背景の中から、「人間の成長と発達」シリーズの締めくくりとして「老年期」のテーマが、“今”とりあげられたことは、社会要請と呼応した「大学公開講座」になったのではないかと思っている。

この講座は、老年期を豊かで実りあるものにするために、問題を、体育・医療・心理・社会福祉・教育などの面から分析し、複眼的にとらえた。そして、講師も、問題の多角的検討ということで、多くの大学から迎え、10名の陣容となった。

「老年期」というテーマは、終局に「死」を見つめなければならぬだけに、常に、心に重さを感じて制作していたように思う。しかも、受講生の約80%が50才以上の方々、つまり、長い生活経験に裏打ちされた「個」の世界を心に確立されている方々なのだ。そして、問題解決の特効薬を求めている不特定多数の聴取者。“重さ”は倍加した。この“重さ”を、“軽さ”ではなく、“軽み”の世界に放てるよう主任講師と話し合いを重ねた。このような確認のもとでスタートした第1回は、ヨーロッパ・中国・日本の「老人観」の違いを、歴史的な観点からとらえることにはじまった。『徒然草』『老人狂歌』『人生をいかに生きるか』（林語堂）などの本の朗読や、老人ホームでのインタビューを横糸にからませながら、「からだ」「こころ」の特徴や問題点を掘り起こし、総論とした。

「大学公開講座」を数年担当して思うことは、放送による「地域にひらかれた大学教育」は、講師、聴取者、制作者の三者が、ともに学びあう姿勢をとったときに、はじめて真価が発揮されるということである。送り手側についてだけ言えば、「学問の切り売り」「机上の学問の伝達」だけに終わらせないこと、「教える」のではなく、「ともに立ち止まり考える」ことをせずに、受け手の理解は存在し得ないということである。このことは、講師、制作者の“人間性”まで問われることなのだ。ある講師の方が、こんな感想をもらして下さった。「放送を聴いてみて、はじめて自分の授業に欠けているものがわかった」…と。

今年度も、スクーリングは熱を帯びた雰囲気終始した。その中で、受講生から「生活デザイン」として、色彩や食事など日常生活に関するテーマを盛り込んでくれたら、との指摘があった。「学問」を体系的にとらえるときに見逃しがちな分野、「大学教育」と「ハウ・トゥもの」との兼合いの難しさを今回も払拭できなかったのではないかと…今後の課題である。

『人生いかに生きるか』（林語堂）の引用文中に次のような言葉がある。「…けだし、美とは、老熟、燻にあり…」。

番組制作にもあてはまる言葉だと胸に刻んだ。

### Ⅲ. 講座の概要

#### ◎科目の概要

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内 容 ・ 方 法	放送曜日・時間・期間
みちのくの建築—風土と景観— (テレビ)	「日本の文化」 「日本の歴史」 シリーズとして いくつかの企画 を実施してきた が、今回は東北 のさまざまな建 築物に光をあて、 その文化的背景 や歴史を探る。	人間の生活の中から 生み出された文化的 所産として建築はと らえられる。本講座 では、くらし、宗教、 社会の変動などと密 接にかかわりながら 発展してきた建築の 歴史、文化的空間と しての建築、建築の 構造などをとりあげ て、東北地方の建築 について考える。	I. 講座は5部からなる。 (1) 序論 1回 (2) 建築の歴史 5回 (3) 文化的空間としての 建築 4回 (4) 建築の構造 2回 (5) まとめ 1回 (1)では、総論として日本にお ける建築と環境とのかかわりに ついて論じる。 (2)では、人々の生活、宗教、 日本の近代化などの面から、建 築の歴史を明らかにしていく。 (3)では、建築を空間としてと らえ、都市環境、気候風土、音 楽、芸能の場という点から考え ていく。 (4)では、建築の構造について、 主に自然とのかかわりに注目し て考察する。 (5)では、前回までの内容をふ まえて、今後の展望を論じる。 II. 全体を通して、東北地方の 建築の特色を浮き彫りにして いき、最後に座談会でまとめ るという方法をとる。	毎週土曜日 午前7時00分 } 午前7時45分 平成元年 10月7日 } 平成元年 12月23日 ただし、第12 回は12月22 日の金曜日の 午前10時00分 } 午前10時45分 に放送 (13回放送)
老年期 (ラジオ)	心理学・教育学 のメインテーマ 「人間の成長と 発達」シリーズ として、「青年 期」「少年期」 「幼年期」に続 いて本年度は、 「老年期」をと りあげる。人生 80年時代といわ れる現代におい て、老年期をみ のりある豊かな ものにするには	今日、本格的な高齢 化社会を迎え、老年 期の問題は多岐にわ たって現れ始めてい る。本講座では、医 療・体育・心理・社 会福祉・教育などの 面から多角的に検討 し、老人自身の問題 に留まらず、幅広く 捉える。そして老年 期が抱える問題の解 決の方向を考えてい く。	I. 講座の構成は6部からなる。 (1) 序論 1回 (2) 身体的問題 3回 (3) 心的問題 4回 (4) 社会福祉 3回 (5) 教育 1回 (6) まとめ 1回 (1)では、総論として老年期問 題とはどのようなものかについ て論じる。 (2)では、体育・医学の立場か ら、老化にともなう生ずる問 題を捉え、それへの対策をかん がえる。 (3)では、老年期の心理につい	毎週日曜日 午後7時00分 } 午後7時45分 平成元年 10月15日 } 平成元年 12月17日 ただし、 第8回は 12月2日 第10回は 12月9日 第12回は

	<p>どうすべきかを 探る。</p>	<p>て多面的に取り上げてその特徴を明らかにするとともに、周囲の人々の問題についても論じていく。</p> <p>(4)では、行政施策だけではなく、民間活動や家庭の問題も含めて、幅広く福祉のあり方を考える。</p> <p>(5)では、老後を豊かなものにするための、学習のあり方について検討していく。</p> <p>(6)では、全体をまとめながら、今後の展望を論じる。</p> <p>Ⅱ. (2)部(3)部(4)部のそれぞれの最後に、主任講師も加わり、対話しながら小括をする。そして最後に座談会で全体をまとめるという方法をとる。</p>	<p>12月16日 の各土曜の 午後8時00分 ） 午後8時45分 に放送 (13回放送)</p>
--	------------------------	--	---

## ◎科目の構成

テレビ科目    みちのくの建築    ー風土と景観ー

放送回 (月日)	中 心 テ ー マ	各 回 の 内 容	担 当 講 師
第1回 (10月7日)	建築と自然環境	人間生活に密着した文化的所産が建築である。各民族が、特色ある自然環境から育成した結果が多様な建築を生み出した。日本における建築と環境とのかかわりの一端について考えてみる。	工学部教授 坂 田      泉
第2回 (10月14日)	くらしとすまい	考古学的調査によれば、日本は歴史的には竪穴住居に続いて高床住居があらわれ、やがて時代と共に変化し特色ある日本住宅の形態が決定する。その展開と内容について概観する。	〃
第3回 (10月21日)	仏のすまい	仏教文化は、大陸から朝鮮半島を経由して日本に伝来し、さらに建築にも大きな影響をもたらした。建築の技術もこれにより一段と飛躍して規模や内容も発展するのであるが、その仏教建築について考察する。	〃
第4回 (10月28日)	神のやどり	日本古来の神の建築は、地上に仮のすまいを建てることより始まり、やがて恒久的な本殿が出現した。そして日本人独自の神仏習合思想の展開下に多様化するその過程について辿ってみる。	〃
第5回 (11月4日)	幕末の洋風建築	嘉永6年(1853)黒船の浦賀来航に衝撃を受けて日本の国際情勢は激変し、外国に対しての開港場などに洋風建築が出現した。この不思議な形の擬洋風建築を中心にその普及について考察する。	〃

第6回 (11月11日)	建築の近代化	欧州の近代建築思想について述べ、日本の明治以降の建築の史変遷を示し、やがて日本近代建築として展開するかかわりを考察し、近代建築とは何かについて考える。	〃
第7回 (11月18日)	町並み景観と 保全修景	村おこし町おこしの全国的な旋風が吹きまくっている。この現象は無機質な都市化に対して人間味豊かな都市環境への回帰のたかまりも一因であろう。伝統的な町並みの再認識再評価がそこにみられる。	〃
第8回 (11月25日)	音と建築	多様な祭を持ち、民謡の宝庫と呼ばれるみちのくの古くからの音楽の場の有様を探りながら、集会場から新しいコンサートホールまで、各地の音楽の場としての建築を訪ねる。	工学部教授 長 友 宗 重
第9回 (12月2日)	光と建築	東北地方の緯度を西へたどると、トルコを経てヨーロッパで最も明るい地帯、エーゲ海、ギリシャ、地中海南部に達する。この太陽の恵みを前提に、気候や気象の影響を調べながら東西の建築を眺めてみる。	〃
第10回 (12月9日)	まつりの空間	日本人はまつり好きといわれる。神と仏に対するその行事から芸能は多面的に変化発展し、その過程から能や歌舞伎が創始された。その空間施設は世界的な舞台を考案創設して、とどまるところを知らない。	工学部教授 坂 田 泉
第11回 (12月16日)	建築構造の発展	それぞれの地域と時代にふさわしい材料と構造により建築物はつくられる。わが国の建築構造は古代から現代までどのように発展してきたか？また、重力や雪、風、地震等の自然の力を建築構造はどう受けとめてきたか？	工学部教授 柴 田 明 徳
第12回 (12月22日)	近代建築の構造	都市のスカイラインを形づくる超高層建築や大空間建築の構造は、どのような力学原理に基づいてつくられるのか？とくに、わが国では地震に対する安全性の確保が重要であるが、それはどのように行われるのか？	〃
第13回 (12月23日)	<座談会> 日本の中の みちのくの建築	12回にわたる内容をかんがみ、東北地方の建築について講師全員でその展望などを語り合う。	工学部教授 坂 田 泉 〃 教授 長 友 宗 重 〃 教授 柴 田 明 徳

ラジオ科目 老年期

放送回 (月日)	中心テーマ	各回の内容	担当講師
第1回 (10月15日)	老年期とは	現在わが国は、かつて経験したことのない程の高齢化社会を迎え、家庭・社会・経済・文化その他さまざまな生活面で、老年期問題の究明と解決	教育学部教授 寺 田 晃



		が求められている。では老年期問題とは具体的にどのようなものなのか。	
第2回 (10月22日)	老年期の身体と運動の機能	老年期には、身体や生理的機能の加齢変化に伴い、知覚機能や運動機能が全般的に著しく低下する。このことは、老人が日常生活を営むうえで物理的、心理的な行動を制約する重要な条件となっている。	仙台大学助教授 鈴木 敏 明
第3回 (10月29日)	老年期の身体障害と予防	加齢と老化は異なる。生命は遺伝子によって定められていることにしても、老化を予防することは人生を豊かにする。老化予防法についての研究成果をわかり易く解説する。	医学部教授 佐々木 英 忠
第4回 (11月5日)	老年期の精神障害と予防	加齢と共に物忘れし易くなるが、総合的な判断力には磨きがかかる。その一方で世事に敏感になり、生活環境の変化などによる不眠が日中の傾眠、無関心などのほけ症状をもたらす。ほけを予防する方法はあるのか。	〃
第5回 (11月12日)	老年期の心のはたらき(5) —認知の行動のスタイル—	老年期には、心身の様々な側面にあらたに多くの変化が生じる時期である。老年期におけるものの見方、推理、判断、記憶など、心のはたらきと行動の特徴を知ることは、日々の生活を安全で楽しいものにするためには大切なことである。	東北福祉大学教授 小 松 紘
第6回 (11月19日)	老年期の心のはたらき(2) —生きがいと孤独感—	老年期には、職業生活・社会生活からの引退、配偶者や親族、友人との死別などの経験を通して、孤独感が強まったり自らの死を身近に意識するようになる。このような背景のなかで、「生きがい」について考える。	東北福祉大学教授 木 村 進
第7回 (11月26日)	老年期と こころの適応 —老人観と 老いの認知—	老人の性は、適応上重要であるにもかかわらず、一般には無性であるかのように思われがちである。老年期のよりよい適応のために、老人自身の老いの認知と周囲の人たちの老人観の変化の必要性を考える。	東北福祉大学教授 村 井 則 子
第8回 (12月2日)	老年期と職業 —生涯・社会参加 ・生きがい—	心身の老化にともなって、職業能力や職業生活の内容は変わってくるが、「定年」といった社会的要因によっても大きく変わってくる。そういう変化を具体的にあげながら、老年期における職業の意味を考える。	教育学部助教授 菊 池 武 克
第9回 (12月3日)	高齢者と社会保障	社会保障は高齢者の所得低下、疾病などによる社会的困難や不安を取り除くためのものである。ここでは高齢者の社会保障として、さらに公的扶助、社会保険、老人保険及び老人福祉などについて考える。	東北福祉大学教授 武 永 親 雄
第10回 (12月9日)	高齢者と家族	核家族に伴う老夫婦世帯や独り暮らし老人の増加の問題、寝たきり老人や痴呆老人の家庭介護の問題、老親の扶養の問題など、高齢者をめぐる家族との関わり合い方について考える。	秋田大学教授 佐 藤 怜
第11回 (12月10日)	高齢者と民間活動	高齢者の生活は地域住民によってどのように支えられているだろうか。高齢者の高福祉を考えると、行政施策だけでは不十分である。民間活動	東北福祉大学教授 武 永 親 雄

		としての市場活動とインフォーマル活動について考える。	
第12回 (12月16日)	高齢者と学習	徒来老年期は学習になじまないものと考えられてきた。しかし、長寿社会の到来を迎えて、高齢者の学習の必要性が力説される現在である。その理由を探り、「高齢者と学習」の意義・目的・内容・方法等について考える。	東北大学名誉教授 塚本哲人
第13回 (12月17日)	老年期問題の 在りかた —21世紀への 展望—	前回までの諸内容をまとめ、老年期に関する今後の問題点を明らかにすると共に、それらをいかに解決し、社会的・個人的にみのある豊かな人生を実現していくかについて語りあい、21世紀への展望を論じることとする。	教育学部教授 寺田晃 医学部教授 佐々木英忠 東北大学名誉教授 塚本哲人

## ◎スクーリング

実施場所等

(テレビ科目) みちのくの建築 —風土と景観—

回数	実施場所	実施日時
第1回スクーリング	東北大学教育学部	平成元年9月30日(土) 午後2時00分～4時00分
第2回スクーリング	〃	平成元年11月5日(日) 午後1時30分～3時30分
第3回スクーリング	〃	平成元年12月3日(日) 午後1時30分～3時30分
第4回スクーリング	〃	平成元年12月17日(日) 午前10時00～12時30分

(ラジオ科目) 老年期

回数	実施場所	実施日時
第1回スクーリング	東北大学教育学部	平成元年9月30日(土) 午後2時00分～4時00分
第2回スクーリング	〃	平成元年11月5日(日) 午前10時30分～12時30分
第3回スクーリング	〃	平成元年12月3日(日) 午前10時30分～12時30分
第4回スクーリング	〃	平成元年12月17日(日) 午前10時00分～12時30分

## ◎再視聴

実施場所	実施期間・日時	備考
東北大学教育学部	10月14日(土)～12月23日(土) 毎週土曜日 午後1時～5時	仙台市博物館に、 常時再視聴の協力を求める。